

国際文化学部長 鹿毛敏夫教授の
「郭瀆沂 ～日本年号を使用した唐人墓主～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2025 年 7 月 25 日(金)

大友時代を
生きた人々



鹿毛 敏夫

郭瀆沂

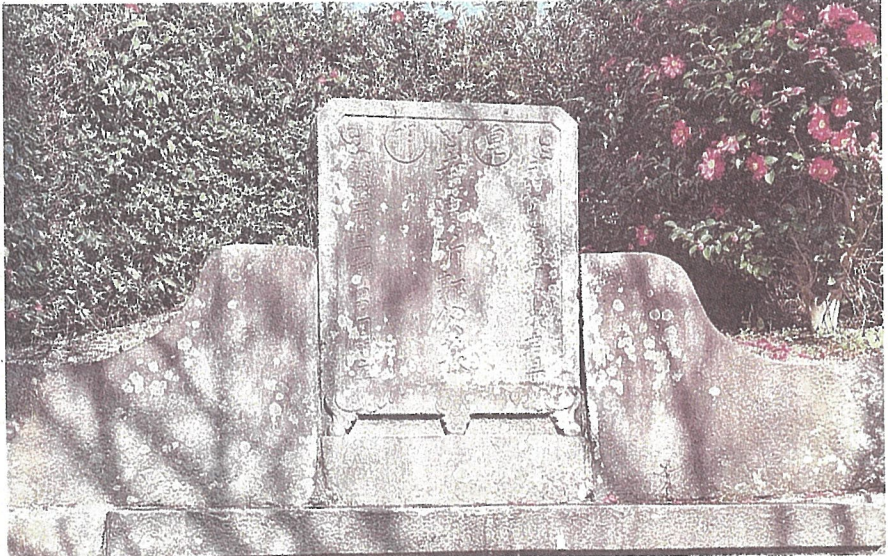
肥後国伊倉（熊本県玉名市）に、17世紀初頭の日本社会で活動した「唐人」（中国人）の痕跡が、唐人墓という形で残存しています。その代表例は、「肥後四位官郭公墓」と呼ばれるもの。立碑形式の石製墓碑を墳丘の前に建てる、中国華南地方の様式に共通する墓です。

その碑文は、中央に大きく「考瀆沂郭公墓」、右側に「元和己未年仲秋吉旦」、左側に「海澄県三部男国珍・栄立」と刻まれています。近世（江戸時代）初頭の朱印船貿易に携わった郭瀆沂の墓で、元和己未（元和5）（1619）年の仲秋（旧暦の8月）に、その子息の国珍と国栄が建立したとの意味です。また、この親子の出身は海澄県、現在の

中国福建省漳州に相当します。伊倉とその周辺には、この他にも、謝振倉と林均吾の唐人墓も残っていて、特に林均吾の方は「元和七年」（21年）の銘があります。さらに、現在も「唐人町」の地名が残っており、また有明海に注ぐ川も「唐人川」と呼ばれています。流域の干拓が進む以前の中世から近世初頭には、唐人町は海に近く、河口の川岸を港とした水上交通が活発だったことが推測されます。

伊倉をはじめ薩摩の坊津（鹿児島県南さつま市）、山川（同指宿市）などの時代に栄えた九州の港町は、地域社会の物流や交易の拠点であると同時に、「唐人」らが滞在または定住する国際交流の場としても機能していました。では、その戦国から江戸初期の日本に生きた彼らは、どのような意識を持って異国の社会に対応したのでしょうか。

日本年号を使用した唐人墓主



肥後四位官郭公墓（熊本県玉名市）

注目されるのは、渡来・定住し、やがて没した際に葬られた「唐人」たちの墓碑に、「元和己未年仲秋吉旦」あるいは「元和七年」のような、日本年号での銘文が彫られていることです。伊倉に限らず、これまで国内で確認された17世紀の唐人墓の大半に、日本年号が使用されているといえます（田中裕介「17世紀の唐人墓―考古学的研究の現状と課題―」）。

中国様式の墓地を用いながら、銘には日本年号を刻む。この唐人たちの行動様式からは、16世紀から17世紀初頭にかけてのコスモポリタン・シティーに住んだ国際人たちの思想も伝わってきます。彼らは、中国様式の墓地を営むことで自らの出自やルーツ・故郷との紐帯を示しながらも、生前の実生活においては、渡航先の在地で妻子らを持つ日本人との血縁を深め、当該日本社会に同化していく意識を有していたといえるのです。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1日掲載